知識（学習）を実践（現実）とつなげる架け橋の必要性

経済学部講師　角　田　真紀子

ここ数年「発達障害」という言葉を耳にすることが多い。発達障害が、言葉として広く一般に認知されるようになったおかげで発達障害の人が生きやすくなったと思いたいが、なかなか難しそうだというのが個人的な印象である。

発達障害を持つ学生達が受講している授業で、「発達障害」について教えることがある。当該学生の中には「あらためて自分の特徴を客観的に認識できた」という者もいれば、まったく無関係な人のこととして認識する者もいる。いずれにせよ両者ともこの授業後は、突然とても友好的な雰囲気で教員に話をしにくることが多い。おそらく教員に安心感を覚えたからだと思うが、時には列をなして待っている。一方、発達障害ではない学生達は、発達障害の種類の多さに驚きつつも「昔そういう子と友達だった」「発達障害の生徒と一緒に遊んだ」ということを思い出す者が多い。しかし特徴的なのは、彼らがその授業の中に発達障害を持つ学生がいることに気づくことはまずないということである。たとえば授業中にグループで輪を作って話をすると発達障害を持つ学生は一人だけ飛び出て中心部に近かったり、みんなの話を聞かずに挑戦的な態度で教員と話そうとしたりすることがある。学生達はこういった彼らの行為に違和感を持ち不思議そうな、あるいは怪訝な顔をしつつも、それには触れないでワークを進めるし、その学生が発達障害であるとは少しも思わない。「やりにくい」というだけである。つまり説明として発達障害の典型例を聞いただけでは、過去にその典型例と重なる経験があればそれが発達障害の特徴であったと推測することはできても、今ここで起きている現実に適用してその状況を捉えることは難しいようなのだ。

このようなことは学生だけでなく教職員にも見られる。発達障害を持つ学生のことはまず「常識がない学生」として捉え、困惑したり心配したり時にはいらいらすることから始まるようである。当該学生が発達障害であると分かると、今度は「怒ってはいけないのではないか」と対応に苦慮する様子が見受けられる。

発達障害について知識を持つことは、発達障害を持っている人にも持っていない人にも大事だとは思う。しかしそれはお互いの「境界」を知ることではないし「腫れものに触るような特別扱い」をすることやされることとも違う。学生相談室員としては、発達障害の人への現場での対応を支援しつつ、０か１かの対応ではないということを含めた実践的知識と理解を広めていく必要があると思う。